

図 5. 保有歯数と認知機能の相関関係 65-92歳の男女について MMSE テスト、保有歯数の検定を行った。MMSE スコアと保有歯数の相関 関係はノンパラメトリックのスペアマン相関分析法にて解析した。相関係数 r. p値を各々グラフ内 に表記した。男女とも、MMSE と保有歯数との正の相関関係がみられた(p<0.05, p>0.4)。

今回の解析結果では、高齢者の血清脂質と認知機能には 有意な相関がみられなかった、その理由として、今回の 被験者に血清脂質の数値が高い者がほとんど認められ ず、ほとんどの者が正常範囲内であったこと、高年期に おける血清脂質の異常は、認知機能低下のリスクになら ない可能性などが考えられる。一方、中年期における高 脂血症や肥満の有無は認知機能に影響を与えた可能性は 考えられるが、それらの既往については調査されなかっ たため、過去の病歴との関連性を調べることはできな かった. 糖尿病と認知機能との相関についても報告があ り、特に2型糖尿病との関連性が指摘されている33.34)。 加えて、中年期の糖尿病患者は将来的な認知機能低下の リスクが高いことが示されている35,36)。今回の解析結 果では、血清脂質の結果と同様に糖代謝マーカーと認知 機能との間に有意な相関関係は認められなかった。従っ て、高年期における糖代謝異常は認知機能に影響を及ぼ していない可能性が考えられた.

歯の保有歯数あるいは機能歯の数と認知機能との間には有意な相関関係があることが報告されている11.37.38)。本解析結果においても、被験高齢者の保有歯数とMMSEスコアとの間に有意な正の相関がみられた、本調査では検査項目が多岐にわたっていたことや時間の制約があったことから、口腔内の検査は保有歯数に限られており、齲蝕歯や健全歯の区別、義歯の有無、歯周病の有無等の検査が行われていない。従って、口腔疾患や口腔機能等との総合的な相関はみることができなかったしかし、血液の各種指標と認知機能との相関はみられなかったにもかかわらず、認知機能と保有歯数との間に相関関係がみられたことは極めて興味深い、高齢者の歯数

は、高齢者の認知機能を推し量る、簡便なサロゲート マーカーとなり得る可能性がある、認知症患者あるいは 認知機能が低下した高齢者は歯科を受診する機会が少な く、また自宅や施設における口腔清掃状態も不良である ケースが多くなるため、歯を喪失しやすくなることが考 えられる.加えて、歯の喪失は咀嚼機能の低下に繋がり、 それは脳血流の低下を引き起こして、認知機能の低下を 助長するかもしれない、また、歯の喪失の大きな原因と して歯周病や齲蝕が考えられるが、それらは食習慣をは じめとした生活習慣が深く関わる疾患である。特に、歯 周病は糖尿病、肥満、心血管病等の生活習慣病との相関 関係が指摘されている39,40). 従って、歯の喪失の背景 には、生活習慣の問題が隠されており、それが認知機能 の低下に直接あるいは間接的に関与した可能性も考えら れる<sup>41,42)</sup>、本研究の結果は、歯を残すことが単に口腔 の QOL の維持に重要であるばかりでなく、健やかに老 いるための重要な要素となっていることを示唆している ものと考える。

### V. 結 論

高知県香北町の高齢者を対象とした疫学調査について 解析した結果、認知機能と脂質・糖質代謝パラメータとの 間に有意な相関関係は認められなかったが、認知機能と保 有歯数との間には相関関係があることが明らかになった

#### 参考文献

 Saunders AM, Schmader K, Breitner JC, Benson MD, Brown WT, Goldfarb L, Goldgaber D., Manwaring MG, Szymanski MH, McCown N: Apolipoprotein E epsilon 4 allele distributions

- in late-onset Alzheimer's disease and in other amyloid-forming diseases. Lancet. **342**(8873):710-711, 1993.
- Starr JM, Whalley LJ, Inch S, Shering PA: Blood pressure and cognitive function in healthy old people. J Am Geriatr Soc, 41

   (7):753-756, 1993.
- 3) Seux ML, Thijs L, Forette F, Staessen JA, Birkenhager WH, Bulpitt CJ, Girerd X, Jaaskivi M, Vanhanen H, Kivinen P, Yodfat Y, Vanska O, Antikainen R, Laks T, Webster JR, Hakamaki T, Lehtomaki E, Lilov E, Grigorov M, Janculova K, Halonen K, Kohonen-Jalonen P, Kermowa R, Nachev C, Tuomilehto J: Correlates of cognitive status of old patients with isolated systolic hypertension: the Syst-Eur Vascular Dementia Project. J Hypertens, 16(7):963-969, 1998.
- 4) Brands AM, Biessels GJ, de Haan EH, Kappelle LJ, Kessels RP: The effects of type 1 diabetes on cognitive performance: a meta-analysis. Diabetes Care, 28(3):726-735, 2005.
- 5) Allen KV, Frier BM, Strachan MW: The relationship between type 2 diabetes and cognitive dysfunction: longitudinal studies and their methodological limitations. Eur J Pharmacol, 490 (1-3):169-175, 2004.
- 6)森本 基:8020 者データバンクの構築について日腔保健 と全身的な健康状態の関係について、厚生科学研究「口腔 保健と全身的な健康状態の関係」運営協議会編 財団法人 口腔保健協会(東京)、1-11,2000.
- 7) 重富俊雄: 口腔機能と老化に関する研究. 痴呆の危険因子 に関する疫学的検討. 口科誌, 47:403-407, 1998.
- 8) 渡邊 誠、伊藤進太郎:歯の喪失とアルツハイマー型認知 症 .サイエンスリサーチ、**5**:36-39,2006.
- Miura H: Relationship between cognitive function and mastication in elderly females. J Oral Rehabil, 30:808-811, 2003.
- Tombaugh TN, McIntyre NJ: The mini-mental state examination: a comprehensive review. J Am Geriatr Soc., 40: 922–935, 1992.
- 11) Takata Y, Ansai T, Soh I, Sonoki K, Awano S, Hamasaki T, Yoshida A, Ohsumi T, Toyoshima K, Nishihara T, Takehara T: Cognitive function and number of teeth in a community-dwelling elderly population without dementia. J Oral Rehabil, 36 (11): 808-813, 2009.
- 12) 「香北町健康長寿計画」報告書 1990-1995 年 香北町, 土 佐山田保健所, 高知医科大学老年科, 1996.
- 13) 「香北町健康長寿計画」報告書 1996-2001 年 香北町, 土 佐山田保健所, 高知医科大学老年科, 2002.
- 14) 松林公蔵, 小澤利男: 後期高齢者の地域における健康管理. Geriatric Medicine, **32**:671-675, 1994.
- 15) 松林公蔵、小澤利男: 老年者の起居、動作、運動機能の客 観的評価. Geriatric Medicine, **32**:533-539, 1994.
- 16) 松林公蔵, 小澤利男: 老年者の情緒に関する評価. Geriatric Medicine. 32:541-546, 1994.

- 17) 松林公蔵、奥宮清人、河本昭子、木村茂昭、和田知子、藤 澤道子、土居義典、島田和幸、小澤利男:地域在住者の自 立度に関する経時的変化、日老医誌、31:214-220, 1994.
- 18) Shimada K, Ozawa T, Matsubayashi K: Dependency of the aged in the community. Lancet, **342**:185, 1993.
- Matsubayashi K, Okumiya K, Wada T, Doi Y, Ozawa T: Secular improvement in self-care independence of old people living in community in Kahoku, Japan. Lancet, 347:60, 1996.
- 20) Matsubayashi K, Okumiya K, Wada T, Osaki Y, Fujisawa M, Doi Y, Ozawa T: Postural dysregulation in systolic blood pressure is associated with worsened scoring on neurobehavioral function tests and leukoaraiosis in the older elderly living in a community. Stroke, 28:2169-2173, 1997.
- Matsubayashi K, Okumiya K, Wada T, Doi Y, Ozawa T: High blood-pressure control in Japanese hypertensive population. Lancet, 350: 290-291, 1997.
- 22) Matsubayashi K: Sex and examination results. Lancet, 350: 1711, 1997.
- 23) Matsubayashi K, Okumiya K, Osaki Y, Fujisawa M, Doi Y: Quality of life of old people living in the community. Lancet. 350:1521-1522, 1997.
- 24) Matsubayashi K, Okumiya K, Nakamura T, Fujisawa M, Osaki Y: Global burden of disease. Lancet, 350:144, 1997.
- 25) Matsubayashi K, Okumiya K, Osaki Y, Fujisawa M, Doi Y: Frailty in elderly Japanese. Lancet, 353:1445, 1999.
- 26) Okumiya K, Matsubayashi K, Nakamura T, Fujisawa M, Osaki Y, Doi Y, Ozawa T: The timed "Up & Go" test and manual button score are useful predictors of functional decline in basic and instrumental ADL in community-dwelling older people. JAGS, 47:497-498, 1999.
- 27) 西永正典:総合機能評価 (CGA) の臨床応用とその意義. 日老医誌. 37:859-865, 2000.
- 28) 西永正典: CGA ツールとその特徴. 老年医学, 39:1493-1499, 2001.
- 29) Schwartz GL, Bailey KR, Mosley T, Knopman DS, Jack CR Jr, Canzanello VJ, Turner ST: Association of ambulatory blood pressure with ischemic brain injury. Hypertension, 49(6):1228– 1234, 2007.
- 30) Kivipelto M, Helkala EL, Laakso MP, Hanninen T, Hallikainen M, Alhainen K, Soininen H, Tuomilehto J, Nissinen A: Midlife vascular risk factors and Alzheimer's disease in later life; longitudinal, population based study. BMJ, 322 (7300):1447–1451, 2001.
- 31) Evans RM, Hui S, Perkins A, Lahiri DK, Poirier J, Farlow MR: Cholesterol and APOE genotype interact to influence Alzheimer disease progression. Neurology, 62 (10): 1869–1871, 2004.
- Kawarabayashi T, Shoji M, Younkin LH, Wen-Lang L, Dickson DW, Murakami T, Matsubara E, Abe K, Ashe KH, Younkin

- SG: Dimeric amyloid beta protein rapidly accumulates in lipid rafts followed by apolipoprotein E and phosphorylated tau accumulation in the Tg2576 mouse model of Alzheimer's disease.

  J Neurosci, 24 (15):3801-3809, 2004.
- 33) Strachan MW, Frier BM, Deary IJ: Cognitive assessment in diabetes: the need for consensus. Diabet Med, 14(6):421-422. 1997.
- 34) Strachan MW, Deary IJ, Ewing FM, Frier BM: Is type II diabetes associated with an increased risk of cognitive dysfunction? A critical review of published studies. Diabetes Care, 20(3):438– 445, 1997.
- 35) Leibson CL, Rocca WA, Hanson VA, Cha R, Kokmen E, O'Brien PC, Palumbo PJ: The risk of dementia among persons with diabetes mellitus: a population-based cohort study. Ann N Y Acad Sci, 826: 422-427, 1997.
- 36) Ott A, Stolk RP, van Harskamp F, Pols HA, Hofman A, Breteler MM: Diabetes mellitus and the risk of dementia: The Rotterdam Study. Neurology, 53(9):1937–1942, 1999.
- 37) Grabe HJ, Schwahn C, Volzke H, Spitzer C, Freyberger HJ, John U, Mundt T, Biffar R, Kocher T: Tooth loss and cognitive

- impairment. J Clin Periodontol, 36(7):550-557, 2009.
- 38) Avlund K, Holm-Pedersen P, Morse DE, Viitanen M, Winblad B : Tooth loss and caries prevalence in very old Swedish people: the relationship to cognitive function and functional ability. Gerodontology, 21 (1):17-26, 2004.
- Tonettí MS: Periodontitis and risk for atherosclerosis: an update on intervention trials. J Clin Periodontol, 36 Suppl 10:15–19, 2009.
- 40) Pischon N, Heng N, Bernimoulin JP, Kleber BM, Willich SN, Pischon T: Obesity, inflammation, and periodontal disease. J Dent Res, 86 (5):400-409, 2007.
- 41) Ship JA: Diabetes and oral health: an overview. J Am Dent Assoc, 134 Spec No: 4S-10S, 2003.
- 42) Kamer AR, Craig RG, Dasanayake AP, Brys M, Glodzik-Sobanska L, de Leon MJ.: Inflammation and Alzheimer's disease: possible role of periodontal diseases. Alzheimers Dement, 4(4): 242-250, 2008.
- 43) Grabe HJ, Schwahn C, Völzke H, Spitzer C, Freyberger HJ, John U, Mundt T, Biffar R, Kocher T: Tooth loss and cognitive impairment. J Clin Periodontol, 36:550-557, 2009.

## 高齢者の口腔・歯科疾患と 免疫能

国立長寿医療センター研究所口腔疾患研究部 部長松下 健二



### はじめに

高齢者は慢性疾患の罹患率が極めて高く、 また複数の疾患を罹患しやすいといった特徴 を有している。また、同じ疾患においても高 齢者では成人と異なった症状を呈することも 多い。加えて、生体防御力が低下しており、 疾患が治りにくいといった特徴がある。口腔 領域においても高齢者においては慢性疾患が 多発する傾向があり、高齢者に特有の症状を 呈する場合も少なくない。高齢者では感染症 が多くなるが、その原因の1つとして加齢に 伴う免疫機能の低下が考えられる。

加齢による免疫系の変化は、高齢者における感染症、自己免疫疾患、ガンの発症の増加

等に深く関与している。免疫系の加齢変化は、 骨髄、胸腺、末梢血、あるいは2次リンパ節 の種々の細胞、あるいは自然免疫系の様々な 因子に影響を及ぼす。老化は、自然免疫系、 獲得免疫系どちらの系に対しても影響するが、 特に獲得免疫系が影響を受けると考えられる。 本稿では、高齢者に特有の口腔疾患と免疫と の関連について考察したいと思う。

### 自然免疫系の加齢変化

自然免疫系は生体防御の第一線として働き、感染防御のための重要な生体システムである。 老化は皮膚、肺、消化管などの上皮のバリア 一機能の低下を引き起こし、病原体の体内へ の侵入を容易にする1、2)。自然免疫系で重要 な液性因子、例えば interleukin (IL)-6, IL-1

プロフィール

Kenji Matsushita

最終学歴 1993年 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科修了 主な職歴 1993年 鹿児島大学歯学部歯科保存学第一講座助手 2002年 米国ジョンスホプキンス大学医学部循環器内科リサーチフェロー 2005年 国立長寿医療センター研究所・口腔疾患研究部部長 2005年 北海道大学歯学部、愛知学院大学歯学部、広島大学歯学部の非常勤講師をそれぞれ併任 2006年 九州大学歯学部の非常勤講師を併任 2007年東北大学大学院歯学連携講座長寿口腔科学講座客員教授を併任 2008年 北海道医療大学歯学部客員教授を併任、中部大学生物機能開発研究所客員研究員を併任 2009年 愛知学院大学歯学部客員教授を併任、鹿児島大学大学院医歯学総合研究科客員研究員を併任 現在に至る 専門分野 老年歯学、血管生物学、歯周病学、口腔細菌学、口腔免疫学

β, tumor necrosis factor-αなどのサイトカインが高齢者の血清中では上昇していることが報告されている³)。また、高齢者は、様々な基礎疾患を有していたり、また細菌の侵襲を受けやすかったりし、それが症状としては現れない炎症反応を持続的に惹起しているため、血中においてそのような炎症マーカーが検出される可能性が考えられる。加齢による自然免疫系の変化をTable 1 にまとめた。好中球は急性炎症期の細菌や真菌感染を防御する重要な細胞である。好中球数については、成人も高齢者も大差がない⁴)。

また、高齢者の好中球も十分な走化性を示す。その一方、高齢者の白血球はオプソニン化された細菌の貪食能が劣ること<sup>5)</sup>、またFcレセプターを介した活性酸素産生が低下していること<sup>6)</sup>などが報告されている。また、マクロファージに関しても、高齢者においては成人に比べて細菌の貪食能や活性酸素産生による殺菌能が低下していることが明らかに

なっている $^{7,8}$ )。樹状細胞に関しては、抗原 特異的  $^{7,8}$ )。樹状細胞に関しては、抗原 特異的  $^{7,8}$ )。樹状細胞に関しては、抗原 能、具体的には、抗原貪食能やリンパ節への ホーミング能が低下している $^{9,10}$ )。natural killer (NK) 細胞はウイルス感染細胞やがん 細胞の排除に働く細胞であるが、高齢者にお いて同細胞の増加が認められる $^{11,12}$ )。しかし ながら、その機能は低下しており、感染細胞 に対する障害活性や $^{7,8}$ 0、感染細胞 に対する障害活性や $^{7,8}$ 1、変染細胞 において低下している $^{13}$ 1。

### 獲得免疫系の加齢変化

獲得免疫は、自然免疫をくぐり抜けてきた 病原体や癌細胞等に対する特異免疫を増幅し、 効率的にそれらを排除する生体防御機構であ るが、老化によってこの機構は大きく変調を きたす。加齢による獲得免疫系の変化を表 2 にまとめた。獲得免疫系における重要な細胞 である T 細胞は胸腺で産生される。胸腺は加

表 1 加齢による自然免疫系の変化

細胞種	増加	減少
好中球	ara-salah kecambahan dari mengelapak dari dari kecambarah kecambarah seri dari dari dari dari dari dari dari d Seri dari dari dari dari dari dari dari da	活性酸素産生 貪食能 殺菌能
マクロファージ		活性酸素産生 貪食能
NK 細胞	細胞数	増殖能 IL-2に対する反応性 細胞障害活性
樹状細胞	·	抗原提示能 ホーミング活性
サイトカイン	血清中のIL-6, IL-1β, TNF-α	

齢によって萎縮してゆき、40~50 歳頃には殆どなくなってしまう<sup>14)</sup>。その結果、胸腺由来のナイーブT細胞は、劇的に減少してしまう<sup>15)</sup>。樹状細胞の機能低下と相まって、T細胞の減少は抗原特異的T細胞の増幅が劇的に減少する<sup>16~18)</sup>。さらに、IL-2 産生能等も低下するため、高齢者においては新規の抗な気を応答が起こりにくくな調に対する十分な免疫応答が起こりにくくな調に対する十分な免疫応答が起こりにくくる<sup>19~21)</sup>。さらに、胸腺の萎縮は、調節性T細胞(Tregs)の減少を引き起こす<sup>22)</sup>。このことは、高齢者に特徴的な現象である炎症の増加や自己免疫疾患の増加と関連しているものと推察される。

抗体産生に重要な細胞である B 細胞も加齢による変化が見受けられる。ナイーブ B 細胞の減少によって、相対的にメモリー 細胞の比率が高い傾向が高齢者にはみられる<sup>23、24)</sup>。また、CD40 やCD27 といった B 細胞上の共刺激分子の発現低下による抗体産生細胞への分化能の低下<sup>25)</sup>、さらには IgMからIgG産生

へのスイッチの消失等が起こり<sup>26)</sup>、老化によって体液性免疫応答の低下が起こると考えられる。このような老化による獲得免疫応答の低下あるいは異常が高齢者特有の口腔疾患の発症や病態形成に関わっている可能性が考えられる。

### 高齢者特有の口腔疾患と免疫

### 1) 齲蝕

齲蝕は日本国民の殆どが罹患する疾患であるが、高齢者の齲蝕と成人の齲蝕とでは様相が異なっている。高齢者においては歯肉の退縮や歯周病の罹患により根面う蝕のリスクが飛躍的に高まる。60歳以上の根面う蝕の罹患率は30歳台のそれの約2倍となっている27)。高齢者においては、根面の露出とともに唾液の減少、さらには齲蝕原性細菌に対する免疫応答の低下が相まって根面う蝕が進行しやすくなることがその原因として考えられる。

表 2 加齢による獲得免疫系の変化

メモリー細胞とエフェクター 細胞、エフェクター 細胞のクローナルな増幅、 炎症性サイトカインの産生	ナイーブT細胞数 T 細胞レパトア 共刺激分子(CD28、 CD27、CD40L等)の発現
	調節性 T 細胞数(Tregs)
自己抗体の産生	B前駆細胞数 ナイーブB細胞数 B 細胞レパトア 共刺激分子(CD27、 CD40等)の発現 IgGへのクラススイッチ
	自己抗体の産生

加えて、寝たきりの高齢者においては口腔清 掃の不足も重要な要素となる。

### 2) 歯周病

高齢者においては、歯肉退縮や口腔清掃不 良が相まって歯周病に罹患している高齢者が 多い。平均寿命の延伸と高齢者の残存歯数の 増加によって、日本国の高齢者においては歯 周病の罹患者は増加傾向にある。また、糖尿 病の合併症でもあり、糖尿病に罹患した高齢 者は、重度の歯周病に罹患しているケースが 多い28、29)。多くの疫学調査によって、歯周病 と糖尿病の相関関係はある程度解明されたが、 両者の因果関係を説明するにはまだ十分なエ ビデンスが蓄積されていないように思われる。 糖尿病が歯周病を増悪する機序について、い くつかのことが想定される。その重要なファ クターとして高血糖が挙げられる。高血糖は 心血管疾患の主要なリスクファクターとして 認知されている30)が、高血糖は非酵素的に生 体のタンパク質を糖化する。これらの糖化最 終産物 (AGE: Advanced glucation endoproducts) は、マクロファージをはじめとする炎症性細 胞を活性化する31)。AGE によって活性化さ れた炎症性細胞は、動脈硬化巣へ集積し、 TNF-α、IL-6、MCP-1 などの炎症性サイト カインや活性酸素を産生し、血管の炎症を増 悪して、動脈硬化を進展させる。 AGE は、血 管内皮細胞における一酸化窒素(NO)の産 生を傷害し、血管内皮機能を低下させ、大小 血管の循環障害を引き起こす32)。また、糖尿 病患者の歯周組織にはAGE が沈着している ことが報告されている33)。したがって、AGE による動脈硬化の進展機序と同様にAGE に よる全身性の炎症惹起と細小動脈を含む血管 機能の障害によって、歯周組織の炎症の増悪

と創傷治癒の遅延が起こっている可能性が考 えられる (図1)。

また、歯周病が糖尿病を増悪する可能性も 考えられる。歯周病は、歯周局所の感染症で あり、歯周病病原細菌とそれに対する生体応 答が全身に波及し糖尿病を増悪する可能性が ある。歯周ポケットに形成される細菌性バイ オフィルムは歯周局所に炎症反応を惹起し、 歯周炎を引き起こす。その際、歯周局所には 炎症性サイトカインをはじめとする生理活性 物質が多量に産生されるが、それは血行性に 全身伝搬される。特にTNF-αはその受容体を 介して骨格筋細胞や脂肪細胞による等の取り 込みを抑制し、インシュリン抵抗性を付与す る34)。また、慢性の歯周炎患者においては 菌血症が頻繁に起こっていることが報告され

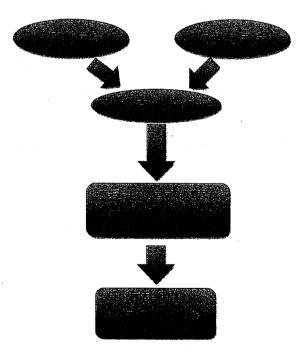


図 1 糖尿病が歯周病に及ぼす影響の一例 糖尿病においてみられる高血糖は、炎症反応の増強、 血管障害、代謝障害等を引き起こすことにより歯周 組織の炎症増悪と創傷治癒の遅延をもたらす。

82

ている。血管内に侵入した歯周病原細菌も、 末梢に伝搬され血管や末梢臓器に定着し、同 部位において炎症反応を惹起する可能性が示 唆されている。歯周病原細菌の多くはグラム 陰性菌であり、その細胞壁成分であるリポ多 糖(LPS)は強力な炎症惹起物質である。ま た、最も重要な歯周病原細菌の一つである Porphyromonas gingivalis は、強力なトリプ シン様プロテアーゼ gingipain を産生し、血 液凝固反応を亢進するとともに血管の炎症を 惹起する(図 2)。最近我々は、このgingipain が血管形成調節因子angiotoietin 2 を含む分 泌顆粒のエキソサイトーシスを誘導し、LPS に対する血管内皮細胞の感受性を高め、血管 の炎症応答を増強することを明らかにした 35)(図 3)。歯周病原細菌由来のこれらの因子 は、協調的に作用して歯周局所の炎症を増悪 するとともに、全身の血管に作用して血管の

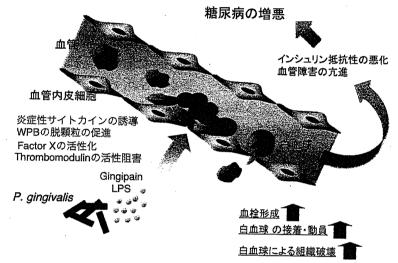


図2 血管を基盤とした歯周病による糖尿病の増悪機序 歯周病原細菌の産生するトリプシン様酵gingipainやリポ多糖は、歯周組 織および全身の血管に作用し、炎症反応の増強や血栓形成を促進するこ とにより糖尿病の病態を増悪する可能性がある。

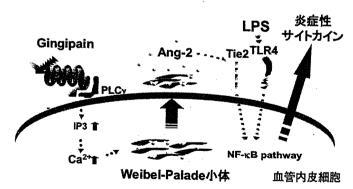


図3 歯周病原細菌由来プロテアーゼによる血管の免疫応答の増幅機序 歯周病原細菌 P. gingivalisの産生する gingipainは血管内皮のエキソサイトーシスを 誘導し、LPSに対する血管内皮の免疫応答を増強する。

炎症を増強し動脈硬化を促進している可能性がある。加えて、それらの因子は糖尿病に合併する微小血管と大血管の障害を増悪する可能性が考えられる。

また、歯周病と脳卒中との相関関係も報告されていたり<sup>36,37)</sup>、歯周病は誤嚥性肺炎のリスク要因であったりするので、高齢者においては特にそのケアが重要である<sup>38,39)</sup>。

### 3) 口腔乾燥症

ドライマウスとも呼ばれるが、唾液の分泌 低下をきたす疾患である。加齢による唾液の 分泌量が低下によって起こるというよりも、 特定の薬の服用によって唾液の分泌量が減っ て口腔乾燥をきたすケースが多い。具体的に は、降圧剤の一種である ACE 阻害剤、 $\alpha$ ,  $\beta$ ブロッカー、カルシウム拮抗剤や向精神薬等 の服用は口腔乾燥の原因となる。また、シェ ーグレン症候群などの自己免疫疾患で口腔乾燥をきたす場合もある。病因としては、自己 抗体の存在が認められる。

その基盤にはCD4 + T細胞の免疫寛容の 喪失が推察されている<sup>40)</sup>が、明確な原因は未 だ不明である。Tregs の機能低下が何らかの 関与をしている可能性も考えられる<sup>41)</sup>。

### 4) 口腔カンジダ症

Candida albicans などのカンジダ属の真菌は、健康な成人の口腔内に常在細菌叢として生息しているが、免疫能が極度に減弱した高齢者においては同菌の過剰な増殖が起こり、口腔粘膜に強度の炎症反応をきたす。唾液中には、様々な抗菌ペプチドが存在し、口腔内の常在細菌叢を制御している。中でもhistatinという抗菌ペプチドは口腔内の真菌の増殖を制御している。しかし、唾液の分泌

が低下するとそれらの分泌量も減少するため、 C. albicans の増殖を許すことになる<sup>42)</sup>。また、 老化による口腔粘膜のバリアー機能の低下は 同菌の定着と侵入を容易にしている可能性が ある<sup>43)</sup>。また、粘膜に定着したC. albicans を 排除するための細胞性免疫も低下しているた めに、難治化するものと考えられる。

### 5) 口腔癌

口腔癌も高齢者において発症率の高まる疾患である。喫煙、ヒトパピローマウイルスの感染、慢性的な刺激等が危険因子に上げられるが、老化による細胞性免疫応答の低下も重要な危険因子と考えられる。NK 細胞あるいは細胞傷害性T 細胞等の増殖や活性の低下は、容易に癌細胞の増殖を許してしまうことになる可能性がある。

### おわりに

高齢者においては、特有の口腔疾患が発症したり、また成人に発症するものとは様相が異なったりしている。その原因の一つとして、加齢による免疫能の低下が考えられる。その詳細な機序は不明な部分が多くその解明が待たれる。また、老化による免疫系の低下は避けられないことであるが、低下のスピードを緩やかにしたりすることができれば、健やかに老いることに大いに貢献できるであろう。

### 参考文献

1) Gomez CR, Boehmer ED, Kovacs EJ: The aging innate immune system. Curr Opin Immunol 2005; 17:457-462.

84

- 2) Nomellini V, Gomez CR, Kovacs EJ: Aging and impairment of innate immunity. Contrib Microbiol 2008; 15: 188-205.
- 3) O'Mahony L, Holland J, Jackson J, Feighery C, Hennessy TP, Mealy K: Quantitative intracellular cytokine measurement: Age-related changes in proinflammatory cytokine production. Clin Exp Immunol 1998; 113: 213-219.
- 4) Chatta GS, Andrews RG, Rodger E, Schrag M, Hammond WP, Dale DC: Hematopoietic progenitors and aging: Alterations in granulocytic precursors and responsiveness to recombinant human g-csf, gm-csf, and il-3. J Gerontol 1993; 48: M207 212.
- 5) Wenisch C, Patruta S, Daxbock F, Krause R, Horl W: Effect of age on human neutrophil function. J Leukoc Biol 2000; 67: 40-45.
- 6) Fulop T, Jr., Foris G, Worum I, Leovey A: Age-dependent alterations of fc gamma receptor-mediated effector functions of human polymorphonuclear leucocytes. Clin Exp Immunol 1985; 61: 425-432.
- 7) Plackett TP, Boehmer ED, Faunce DE, Kovacs EJ: Aging and innate immune cells. J Leukoc Biol 2004; 76: 291-299.
- 8) Swift ME, Burns AL, Gray KL, DiPietro LA: Age-related alterations in the inflammatory response to dermal injury. J Invest Dermatol 2001; 117: 1027-1035.
- 9) Agrawal A, Agrawal S, Gupta S: Dendritic cells in human aging. Exp Gerontol 2007; 42: 421-426.
- 10) Grolleau-Julius A, Harning EK,

- Abernathy LM, Yung RL: Impaired dendritic cell function in aging leads to defective antitumor immunity. Cancer Res 2008; 68: 6341-6349.
- 11) Miyaji C, Watanabe H, Toma H, Akisaka M, Tomiyama K, Sato Y, Abo T: Functional alteration of granulocytes, nk cells, and natural killer t cells in centenarians. Hum Immunol 2000; 61:908-916.
- 12) Borrego F, Alonso MC, Galiani MD, Carracedo J, Ramirez R, Ostos B, Pena J, Solana R: Nk phenotypic markers and il 2 response in nk cells 7 from elderly people. Exp Gerontol 1999; 34: 253-265.
- 13) Solana R, Alonso MC, Pena J: Natural killer cells in healthy aging. Exp Gerontol 1999; 34: 435-443.
- 14) George AJ, Ritter MA: Thymic involution with ageing: Obsolescence or good housekeeping? Immunol Today 1996; 17: 267-272.
- 15) Fagnoni FF, Vescovini R, Passeri G, Bologna G, Pedrazzoni M, Lavagetto G, Casti A, Franceschi C, Passeri M, Sansoni P: Shortage of circulating naive cd 8 (+) t cells provides new insights on immunodeficiency in aging. Blood 2000; 95: 2860 2868.
- 16) Goronzy JJ, Weyand CM: T cell development and receptor diversity during aging. Curr Opin Immunol 2005; 17: 468 475.
- 17) Vallejo AN: Cd28 extinction in human t cells: Altered functions and the program of t-cell senescence. Immunol Rev 2005; 205: 158-169.
- 18) Spaulding C, Guo W, Effros RB:

Resistance to apoptosis in human cd 8 + t cells that reach replicative senescence after multiple rounds of antigen-specific proliferation. Exp Gerontol 1999; 34:633 - 644.

- 19) Pfister G, Weiskopf D, Lazuardi L, Kovaiou RD, Cioca DP, Keller M, Lorbeg B, Parson W, Grubeck-Loebenstein B: Naive t cells in the elderly: Are they still there? Ann N Y Acad Sci 2006; 1067: 152-157.
- 20) Kohler S, Wagner U, Pierer M, Kimmig S, Oppmann B, Mowes B, Julke K, Romagnani C, Thiel A: Post-thymic in vivo proliferation of naive cd 4 + t cells constrains the tcr repertoire in healthy human adults. Eur J Immunol 2005; 35:1987 –1994.
- 21) Haynes L, Eaton SM, Burns EM, Randall TD, Swain SL: Cd 4 t cell memory derived from young naive cells functions well into old age, but memory generated from aged naive cells functions poorly. Proc Natl Acad Sci USA 2003; 100: 15053-15058.
- 22) Tsaknaridis L, Spencer L, Culbertson N, Hicks K, LaTocha D, Chou YK, Whitham RH, Bakke A, Jones RE, Offner H, Bourdette DN, Vandenbark AA: Functional assay for human cd 4 + cd25 + treg cells reveals an age-dependent loss of suppressive activity. J Neurosci Res 2003; 74: 296 308.
- 23) LeMaoult J, Messaoudi I, Manavalan JS, Potvin H, Nikolich-Zugich D, Dyall R, Szabo P, Weksler ME, Nikolich-Zugich J: Agerelated 8 dysregulation in cd 8 t cell homeostasis: Kinetics of a diversity loss. J Immunol 2000; 165: 2367-2373.

- 24) Weksler ME, Szabo P: The effect of age on the b-cell repertoire. J Clin Immunol 2000; 20: 240-249.
- 25) Colonna-Romano G, Bulati M, Aquino A, Scialabba G, Candore G, Lio D, Motta M, Malaguarnera M, Caruso C: B cells in the aged: Cd27, cd5, and cd40 expression. Mech Ageing Dev 2003; 124: 389-393.
- 26) Johnson SA, Cambier JC: Ageing, autoimmunity and arthritis: Senescence of the b cell compartment implications for humoral immunity. Arthritis Res Ther 2004; 6: 131-139.
- 27) MacDonald DE: Principles of geriatric dentistry and their application to the older adult with a physical disability. Clin Geriatr Med 2006; 22: 413-434; x.
- 28) Soell M, Hassan M, Miliauskaite A, Haikel Y, Selimovic D: The oral cavity of elderly patients in diabetes. Diabetes Metab 2007; 33 Suppl 1: S10-18.
- 29) Boehm TK, Scannapieco FA: The epidemiology, consequences and management of periodontal disease in older adults. J Am Dent Assoc 2007; 138 Suppl: 26S 33S.
- 30) Ludwig DS: The glycemic index: Physiological mechanisms relating to obesity, diabetes, and cardiovascular disease. JAMA 2002; 287: 2414-2423.
- 31) Schmidt AM, Yan SD, Brett J, Mora R, Nowygrod R, Stern D: Regulation of human mononuclear phagocyte migration by cell surface-binding proteins for advanced glycation end products. J Clin Invest 1993; 91: 2155-2168.
- 32) Goldin A, Beckman JA, Schmidt AM,

86

Creager MA: Advanced glycation end products: Sparking the development of diabetic vascular injury. Circulation 2006; 114:597-605.

- 33) Schmidt AM, Weidman E, Lalla E, Yan SD, Hori O, Cao R, Brett JG, Lamster IB: Advanced glycation endproducts (ages) induce oxidant stress in the gingiva: A potential mechanism underlying accelerated periodontal disease associated with diabetes. J Periodontal Res 1996; 31:508-515.
- 34) Hotamisligil GS, Budavari A, Murray D, Spiegelman BM: Reduced 9 tyrosine kinase activity of the insulin receptor in obesity-diabetes. Central role of tumor necrosis factor-alpha. J Clin Invest 1994; 94: 1543 1549.
- 35) Inomata M, Into T, Ishihara Y, Nakashima M, Noguchi T, Matsushita K: Arginine-specific gingipain a from porphyromonas gingivalis induces weibel-palade body exocytosis and enhanced activation of vascular endothelial cells through protease-activated receptors. Microbes Infect 2007; 9:1500-1506.
- 36) Palm F, Urbanek C, Grau A: Infection, its treatment and the risk for stroke. Curr Vasc Pharmacol 2009; 7:146-152.
- 37) Scannapieco FA, Bush RB, Paju S: Associations between periodontal disease and risk for atherosclerosis, cardiovascular disease, and stroke. A systematic review. Ann Periodontol 2003; 8:38-53.
- 38) Li X, Kolltveit KM, Tronstad L, Olsen I: Systemic diseases caused by oral infection. Clin Microbiol Rev 2000; 13:547

-558.

- 39) Raghavendran K, Mylotte JM, Scannapieco FA: Nursing home-associated pneumonia, hospital-acquired pneumonia and ventilator-associated pneumonia: The contribution of dental biofilms and periodontal inflammation. Periodontol 2000 2007; 44: 164-177.
- 40) Katsifis GE, Moutsopoulos NM, Wahl SM: T lymphocytes in sjogren's syndrome: Contributors to and regulators of pathophysiology. Clin Rev Allergy Immunol 2007; 32: 252-264.
- 41) Li X, Qian L, Wang G, Zhang H, Wang X, Chen K, Zhai Z, Li Q, Wang Y, Harris DC: T regulatory cells are markedly diminished in diseased salivary glands of patients with primary sjogren's syndrome. J Rheumatol 2007; 34: 2438 2445.
- 42) Meiller TF, Hube B, Schild L, Shirtliff ME, Scheper MA, Winkler R, Ton A, Jabra-Rizk MA: A novel immune evasion strategy of candida albicans: Proteolytic cleavage of a salivary antimicrobial peptide. PLoS One 2009; 4: e5039.
- 43) Bodineau A, Folliguet M, Seguier S: Tissular senescence and modifications of oral ecosystem in the elderly: Risk factors for mucosal pathologies. Curr Aging Sci 2009; 2:109-120.

# Porphyromonas gingivalis is widely distributed in subgingival plaque biofilm of elderly subjects

Yuki Abiko, Takuichi Sato, Kenji Matsushita, Reiko Sakashita, and Nobuhiro Takahashi

Abstract. The frequency of periodontal diseases appears to increase with age. *Porphyromonas gingivalis* is widely regarded as major periodontal pathogens. This study aimed to quantify P. gingivalis in subgingival plaque biofilm of elderly subjects by real-time polymerase chain reaction (PCR). Subgingival plaque was obtained from 198 periodontally healthy (mean age, 70.3 years) and 176 subjects with periodontitis (70.6 years). Quantification of total bacteria and P. gingivalis was performed by real-time PCR using universal and P. gingivalis-specific primers based on 16S rRNA genes, respectively. Both the detection frequency and mean proportion of P. gingivalis were significantly higher in subjects with periodontitis than in periodontally healthy subjects (p<0.0001). Nevertheless, P. gingivalis was detected frequently both from subjects with periodontitis and periodontally healthy subjects. These results suggest that P. gingivalis is widely distributed in subgingival plaque biofilm of elderly subjects.

**Key words.** elderly subjects, plaque biofilm, *Porphyromonas gingivalis*, quantitative polymerase chain reaction, 16S ribosomal RNA

### 1 Introduction

Qualitative and quantitative changes of the subgingival plaque biofilm microflora in periodontal pockets are thought to be associated with the development and progression of periodontitis. The frequency of periodontal diseases appears to increase

Y. Abiko (🖾), T. Sato, and N. Takahashi

Division of Oral Ecology and Biochemistry, Tohoku University Graduate School of Dentistry, Sendai 980-8575, Japan

e-mail: abiko@mail.tains.tohoku.ac.jp

with age. However, few studies have been investigated on subgingival microflora in elderly subjects. *Porphyromonas gingivalis* is widely regarded as major periodontal pathogens. This study aimed to quantify *P. gingivalis* in subgingival plaque biofilm of elderly subjects by real-time polymerase chain reaction (PCR).

## 2 Relationship Between Periodontal Status and *P. gingivalis* in Subgingival Plaque Biofilm of Elderly Subjects

Subgingival plaque was obtained from independent elderly subjects (60 years and over, n=374) from gingival crevices with the deepest probing depths. Gender, probing depth, bleeding on probing (BOP) and wearing of denture were examined and recorded. Quantification of total bacteria and P gingivalis was performed by real-time PCR using universal and P gingivalis-specific primers based on 16S rRNA genes [1], respectively. According to the deepest probing depths, 198 (mean age, 70.3 years) were considered as periodontally healthy, while 176 (70.6 years) were considered as subjects with periodontitis. Both the detection frequency and mean proportion of P gingivalis were significantly higher in subjects with periodontitis than in periodontally healthy subjects (p < 0.0001). The proportion of P gingivalis was significantly higher in subjects with BOP-positive (p < 0.05), but not related to subjects' gender, wearing of denture and age.

# 3 Inhabitation of *P. gingivalis* in Subgingival Plaque of Elderly Subjects

It has been reported that *P. gingivalis* is generally detected from subjects with periodontitis [1, 2]. However, in this study, *P. gingivalis* was detected frequently both from subjects with periodontitis and periodontally healthy subjects, suggesting that the inhabitation of *P. gingivalis* is a specific feature of subgingival plaque biofilm of elderly subjects. Amano et al. [3] reported that the pathogenicity of *P. gingivalis* was different among strains, suggesting the possibility that low pathogenic *P. gingivalis* strains colonized in periodontally healthy elderly subjects in this study.

### 4 Clinical Implication

This study suggests that the inhabitation of P. gingivalis in subgingival plaque biofilm of elderly subjects is one of the risk factors of periodontitis, as well as the decrease of host defense mechanism  $\sqrt[4]{2}$  age, although further study is required to elucidate the pathogenicity of P. gingivalis found in periodontally healthy elderly

242 Y Abiko et al.

subjects. The findings of this study support the necessity and importance of periodontal control, especially in elderly subjects.

### References

- 1. Abiko Y, Sato T, Mayanagi G et al (2010) Profiling of subgingival plaque biofilm microflora from periodontally healthy subjects and from subjects with periodontitis using quantitative real-time PCR. J Periodontal Res 45 (in press)
- 2. Kuboniwa M, Amano A, Kimura RK et al (2004) Quantitative detection of periodontal pathogens using real-time polymerase chain reaction with TaqMan probes. Oral Microbiol Immunol 19:168–176
- 3. Amano A, Nakagawa I, Kataoka K et al (1999) Distribution of *Porphyromonas gingivalis* strains with *fimA* genotypes in periodontitis patients. J Clin Microbiol 37:1426–1430

### ARTICLES

## Aberrant silencing of imprinted genes on chromosome 12qF1 in mouse induced pluripotent stem cells

Matthias Stadtfeld<sup>1,2,3</sup>\*, Effie Apostolou<sup>1,2,3</sup>\*, Hidenori Akutsu<sup>4</sup>, Atsushi Fukuda<sup>5</sup>, Patricia Follett<sup>1</sup>, Sridaran Natesan<sup>6</sup>, Tomohiro Kono<sup>5</sup>, Toshi Shioda<sup>2</sup> & Konrad Hochedlinger<sup>1,2,3</sup>

Induced pluripotent stem cells (iPSCs) have been generated by enforced expression of defined sets of transcription factors in somatic cells. It remains controversial whether iPSCs are molecularly and functionally equivalent to blastocyst-derived embryonic stem (ES) cells. By comparing genetically identical mouse ES cells and iPSCs, we show here that their overall messenger RNA and microRNA expression patterns are indistinguishable with the exception of a few transcripts encoded within the imprinted Dlk1-Dio3 gene cluster on chromosome 12qF1, which were aberrantly silenced in most of the iPSC clones. Consistent with a developmental role of the Dlk1-Dio3 gene cluster, these iPSC clones contributed poorly to chimaeras and failed to support the development of entirely iPSC-derived animals ('all-iPSC mice'). In contrast, iPSC clones with normal expression of the Dlk1-Dio3 cluster contributed to high-grade chimaeras and generated viable all-iPSC mice. Notably, treatment of an iPSC clone that had silenced Dlk1-Dio3 with a histone deacetylase inhibitor reactivated the locus and rescued its ability to support full-term development of all-iPSC mice. Thus, the expression state of a single imprinted gene cluster seems to distinguish most murine iPSCs from ES cells and allows for the prospective identification of iPSC clones that have the full development potential of ES cells.

Induced pluripotent stem cells (iPSCs), generated by the overexpression of transcription factors such as Oct4 (also called Pou5f1), Sox2, Klf4 and c-Myc in somatic cells<sup>1,2</sup>, have enormous therapeutic potential as they enable the derivation of patient-specific pluripotent cell lines to study and possibly treat degenerative diseases. Although the generation of iPSCs is technically simple and ethically uncontroversial, it remains unclear whether iPSCs are molecularly and functionally different from ES cells derived from blastocysts, which are considered the gold standard for pluripotent cells. Previously published reports indicate high similarities between ES cells and iPSCs, including indistinguishable global histone modification and DNA methylation patterns<sup>3,4</sup>. In addition, iPSCs, like ES cells, give rise to numerous differentiated cell types, including the germ line, in the context of chimaeric animals<sup>5,6</sup>. More recently, iPSCs have been shown to support the development of all-iPSC mice using tetraploid (4n) embryo complementation<sup>7-9</sup>, the most stringent assay for developmental potential10,11.

Despite these similarities, there is emerging evidence for substantial differences between ES cells and iPSCs. For example, most iPSC clones give rise to low-grade chimaeras after injection into diploid blastocysts and fail to support the development of postnatal all-iPSC mice upon 4n embryo complementation 12-14. At the molecular level, major differences in mRNA and microRNA (miRNA) expression<sup>15-17</sup>, as well as in DNA methylation<sup>18-20</sup>, have been reported between ES cells and iPSCs. These observations indicate that factormediated reprogramming results in abnormalities in resultant iPSCs, which could impede their therapeutic utility. In contrast, nucleartransfer-mediated reprogramming gives rise to nuclear transfer ES cells that are molecularly and functionality indistinguishable from ES cells derived from fertilized embryos<sup>21,22</sup>, raising the possibility that nuclear transfer generates cells that are more completely reprogrammed than iPSCs.

A potential limitation of the aforementioned studies is that ES cells were compared with iPSCs of different genetic backgrounds and harbouring viral transgenes, which are known to affect gene expression patterns<sup>21,23</sup> and the functionality<sup>1,6</sup> of cells. We therefore revisited the question of whether ES cells and iPSCs are equivalent by comparing genetically matched cell lines.

### Transcriptional comparison of ES cells and iPSCs

To circumvent the potentially confounding effects of genetic background and viral integrations on gene expression patterns and developmental potential, we used a novel transgenic reprogramming system to generate genetically matched mouse ES cells and iPSCs<sup>24</sup>. Briefly, a polycistronic cassette expressing Oct4, Klf4, Sox2 and c-Myc25 (OKSM) under the control of a doxycycline-inducible promoter was inserted into the collagen type I al (Collal) locus of ES cells expressing the reverse tetracycline-dependent transactivator (rtTA) from the ROSA26 promoter<sup>26</sup>. These collagen-OKSM ES cells were then used to generate mice from which different somatic cell types were isolated and induced with doxycycline to derive genetically matched iPSCs for molecular and functional comparisons (Fig. 1a, b).

Howard Hughes Medical Institute at Massachusetts General Hospital, Center for Regenerative Medicine; Harvard Stem Cell Institute, 185 Cambridge Street, Boston, Massachusetts 02114, USA. <sup>2</sup>Massachusetts General Hospital Cancer Center and Harvard Medical School, 149 13th Street, Charlestown, Massachusetts 02129, USA. <sup>3</sup>Department of Stem Cell and Regenerative Biology, Harvard University and Harvard Medical School, 42 Church Street, Cambridge, Massachusetts 02138, USA. <sup>4</sup>Department of Reproductive Biology, National BioScience, Tokyo University of Agriculture, Tokyo 156-8502, Japan. <sup>6</sup>Sanofi-Aventis, 270 Albany 337 Institute for Child Health and Development, Tokyo 157-8535, Japan. <sup>5</sup>Department of Street, Cambridge, Massachusetts 02139, USA

ARTICLES NATURE|Vol 465|13 May 2010

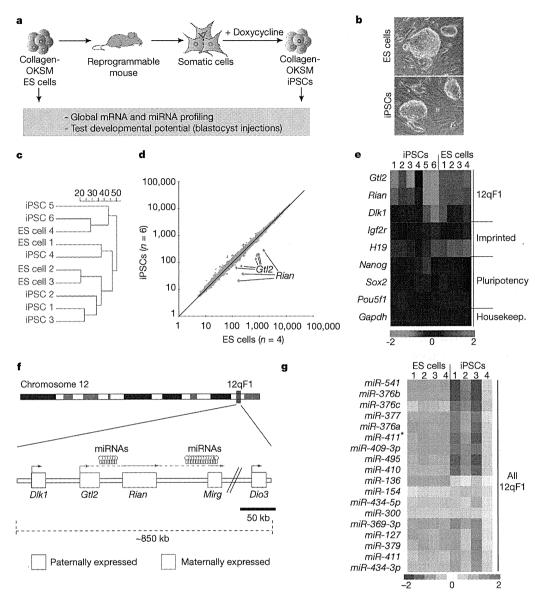


Figure 1 | Aberrant silencing of the Dlk1-Dio3 gene cluster in mouse iPSCs. a, Strategy for comparing genetically matched ES cells and iPSCs generated with the doxycycline-controllable collagen-OKSM system. b, Morphology of collagen-OKSM ES cells and iPSCs. c, Unsupervised clustering of four ES cell and six derivative iPSC lines based on microarray expression data. d, Scatter plot of microarray data comparing iPSCs and ES cells with differentially expressed genes highlighted in green (twofold, P < 0.05, t-test with

We first compared the abilities of parental collagen-OKSM ES cells and iPSCs derived from mouse embryonic fibroblasts (MEFs) to support the development of all-iPSC mice using 4n embryo complementation. The two tested ES cell lines gave rise to viable mice at expected frequencies (13–20%)<sup>11</sup>, demonstrating that the OKSM transgene per se does not adversely affect development (Supplementary Table 1). In contrast, all four tested iPSC lines repeatedly failed to support the development of all-iPSC mice, indicating qualitative differences between these iPSCs and ES cells (Supplementary Table 1).

We reasoned that a transcriptional comparison of the iPSC lines that failed 4n complementation with matched 4n-complementation-competent ES cell lines might reveal molecular changes that explain the developmental deficits of iPSCs. Global mRNA profiling showed marked similarities in the overall transcriptional patterns of four collagen-OKSM ES cells and six derivative iPSCs and did not separate these cell lines using unsupervised clustering or principal component analysis (Fig. 1c and data not shown). In fact, only two transcript were identified as differentially expressed (>2-fold difference, t-test)

Benjamini–Hochberg correction). **e**, Heat map showing relative expression levels of selected mRNAs in ES cells and iPSCs. **f**, Schematic representation of the Dlk1-Dio3 gene cluster with maternally and paternally expressed transcripts shown in red and blue, respectively. **g**, Heat map showing miRNAs that are differentially expressed between ES cells and iPSCs (twofold, P < 0.01, t-test).

P < 0.05) between ES cells and iPSCs. These were the non-coding RNA *Gtl2* (also know as *Meg3*) and the small nucleolar RNA *Rian* (Fig. 1d, e).

### Repression of Dlk1-Dio3 transcripts in iPSCs

Gtl2 and Rian localize to the imprinted Dlk1–Dio3 gene cluster on mouse chromosome 12qF1 and are maternally expressed in mammals (Fig. 1f)<sup>27</sup>. Both genes were strongly repressed in iPSC clones compared to ES cell clones, whereas expression of pluripotency and housekeeping genes remained unaffected (Fig. 1e). Quantitative PCR (qPCR) analysis of Gtl2, Rian and Mirg, another maternally expressed imprinted gene in the Dlk1–Dio3 cluster, confirmed transcriptional silencing in iPSCs (Supplementary Fig. 1a). Expression of other imprinted genes showed clone-to-clone variations, as was previously seen for ES cells<sup>28</sup>, but no consistent differences between ES cells and iPSCs (Fig. 1e and Supplementary Table 2). This shows that ipprinted gene silencing is not a genome-wide phenomenon. Of 338

in the expression of  $\sim$ 300 transcripts that have recently been reported to be differentially regulated in a comparison of mouse and human iPSCs with ES cells<sup>15</sup> (Supplementary Fig. 2a). However, silencing of *Gtl2* was also evident in the murine-specific iPSC data set used in that study (Supplementary Fig. 2c). Together, these data indicate that a relatively small set of transcripts distinguishes genetically matched iPSCs and ES cells, and suggest that many of the previously seen differences are probably due to variations in genetic background or viral transgene insertions.

Imprinting of the *Dlk1–Dio3* locus is accompanied by differential expression of about 50 miRNAs (Fig. 1f)<sup>29,30</sup>. We therefore performed genome-wide miRNA profiling on the same samples as analysed for mRNA expression. Of 336 miRNAs detected, 21 (6.3%) were differentially expressed between all ES cell and iPSC clones analysed (Fig. 1g and Supplementary Table 3). All of these miRNAs localized to chromosome 12qF1 and were silenced in iPSCs, thus corroborating the notion that most iPSCs show aberrant silencing of this major imprinting domain.

To determine the generality of *Gtl2* silencing in iPSCs, we measured its expression in 61 additional iPSC lines derived from haematopoietic

stem cells (11 lines), granulocyte-macrophage progenitors (11 lines), granulocytes (9 lines), peritoneal fibroblasts (6 lines), tail-tip fibroblasts (6 lines) and keratinocytes (18 lines). Only four of these lines (5.8%), originating from either peritoneal or tail-tip fibroblasts, showed *Gtl2* expression levels similar to those of ES cells (termed 'Gtl2<sup>on</sup> clones') (Fig. 2a and Supplementary Fig. 1b, c). The finding that the vast majority of iPSC clones showed transcriptional suppression of *Gtl2* (termed 'Gtl2<sup>off</sup> clones') demonstrates that silencing of this locus occurs in iPSCs derived from different cell types at various stages of differentiation. Analysis of published microarray data sets comparing ES cells and iPSCs generated from mouse fibroblasts, neural and bone marrow cells also showed repression of maternally expressed 12qF1 transcripts (Supplementary Fig. 2b–e), supporting the notion that silencing of this cluster is a common outcome upon factor-mediated reprogramming.

### Developmental effects of Dlk1-Dio3 silencing

Dysregulation of genes within the Dlk1-Dio3 cluster can be detrimental during pre- and postnatal mouse development<sup>31-35</sup>. To assess whether the expression status of Gtl2 and its associated transcripts

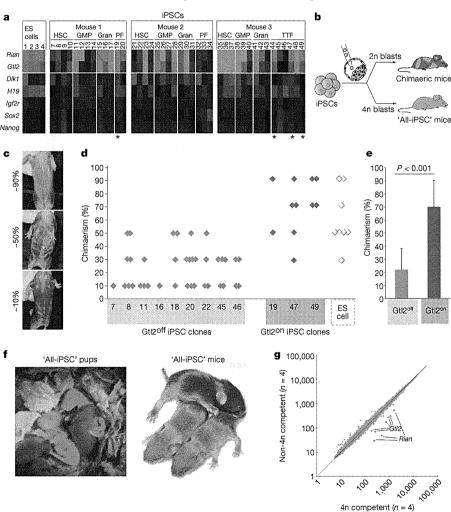


Figure 2 | Developmental consequences of *Dlk1-Dio3* silencing. a, Heat map showing relative expression levels of *Gtl2*, *Rian* and other select genes in ES cells and iPSCs derived from haematopoietic stem cells (HSC), granulocyte-macrophage progenitors (GMP), granulocytes (Gran), peritoneal fibroblasts (PF) and tail-tip fibroblasts (TTF). Four iPSC clones expressing ES-cell-like levels of *Gtl2* and *Rian* were identified (highlighted by asterisks) (iPSC clone number 18 was analysed only by qPCR; see Supplementary Fig. 1b). b, Strategy for assessing the developmental potential of iPSC clones by injection into diploid (2n) and tetraploid (4n) blastocysts to produce chimaeric or all-iPSC mice, respectively. c, Images of representative chimaeras with agouti coat colour indicating iPSC origin. d, Quantification 339

coat colour chimaerism in mice derived from indicated  $\operatorname{Gtl2}^{\operatorname{off}}$  clones (green diamonds),  $\operatorname{Gtl2}^{\operatorname{on}}$  iPSC clones (red diamonds) and ES cells (open diamonds). e, Statistical analysis of coat colour chimaerism in mice derived form  $\operatorname{Gtl2}^{\operatorname{off}}$  and  $\operatorname{Gtl2}^{\operatorname{on}}$  iPSC clones. Error bars indicate standard deviations, n=38 for  $\operatorname{Gtl2}^{\operatorname{off}}$  clones and n=11 for  $\operatorname{Gtl2}^{\operatorname{on}}$  clones, P<0.001. f, Images of two  $\operatorname{GFP}^+$  all-iPSC neonates (left) and two agouti all-iPSC mice (right). g, Scatter plot showing intensity levels of all probe sets covered by microarray analysis; highlighted in green are those probe sets that were significantly different between 4n complementation-competent iPSCs (clones 19, 44, 47 and 49) and non-4n complementation-competent iPSCs (clones 18, 20, 45 and 48) (twofold, P<0.05, t-test with Benjamini–Hochberg correction).

ARTICLES NATURE|Vol 465|13 May 2010

correlates with the developmental potential of iPSCs, we injected nine Gtl2off clones into diploid blastocysts. This resulted in adult chimaeras that exhibited low-to-medium degree (10-50%) coat colour chimaerism (Fig. 2b-e and Supplementary Table 4). In contrast, injection of three Gtl2<sup>on</sup> iPSC clones yielded adult mice with a coat colour chimaerism ranging from 30% to 100%, similar to the chimaerism seen with ES cells (Fig. 2d, e and Supplementary Table 4). Importantly, four out of four Gtl2<sup>on</sup> iPSC clones supported the development of neonatal all-iPSC mice upon injection into 4n blastocysts at efficiencies comparable to those observed with ES cells (7–19% for iPSCs compared with 13–20% for ES cells) (Supplementary Table 1). We confirmed that these mice were entirely iPSCderived by PCR for strain-specific polymorphisms (Supplementary Fig. 3), by detection of homogenous GFP fluorescence of all-iPSC neonates, originating from a ROSA26-EGFP allele introduced into the parental ES cells, and by uniform agouti coat colour of adolescent all-iPSC mice (Fig. 2f). To our knowledge, this is the first demonstration of animals produced entirely from adult-derived iPSCs.

In contrast to  $Gtl2^{on}$  iPSC clones, injection of ten  $Gtl2^{off}$  iPSC clones into 4n blastocysts consistently failed to produce all-iPSC pups but instead resulted in resorptions (Supplementary Table 1). Thus, the expression status of Gtl2 in these iPSCs predicts their developmental potential into chimaeric and all-iPSC mice. The conclusion that the activation status of maternally expressed genes on chromosome 12qF1 is a strong indicator of the developmental potential of iPSCs was

further supported by the analysis of two published array data sets, which showed that *Gtl2* was expressed in 4n complementation-competent ES cell and iPSC lines but was downregulated in non-4n complementation-competent iPSC lines<sup>8,9</sup> (Supplementary Fig. 4).

To test whether Gtl2<sup>on</sup> and Gtl2<sup>off</sup> iPSCs can be distinguished by the expression of genes outside of 12qF1, we performed global mRNA and miRNA expression profiling of four non-4n complementation-competent and four 4n complementation-competent iPSC lines (all derived from fibroblasts). This analysis identified only *Gtl2*, *Rian* and a total of 26 miRNAs, which all localize to the *Dlk1*–*Dio3* cluster, as differentially expressed, suggesting that the dysregulation of 12qF1 transcripts alone is responsible for the failure of Gtl2<sup>off</sup> iPSCs to support the development of all-iPSC mice (Fig. 2g and Supplementary Table 5).

### Epigenetic mechanism of Dlk1-Dio3 repression

Imprinting of the *Dlk1–Dio3* cluster is regulated by differentially methylated regions (DMRs) that become epigenetically modified in the germ line. These include an intergenic DMR (IG-DMR), located between the *Dlk1* and *Glt2* genes<sup>19</sup>, and a DMR spanning the *Gtl2* promoter (*Gtl2* DMR)<sup>15</sup>. To determine whether aberrant DNA methylation might be responsible for the transcriptional silencing seen in Gtl2<sup>off</sup> iPSC lines, we compared the methylation status of IG-DMR, *Gtl2* DMR and three other CpG-rich regions on chromosome 12qF1 in ES cells, iPSCs and their parental tail-tip fibroblasts (Fig. 3a). As expected for germline-imprinted regions,

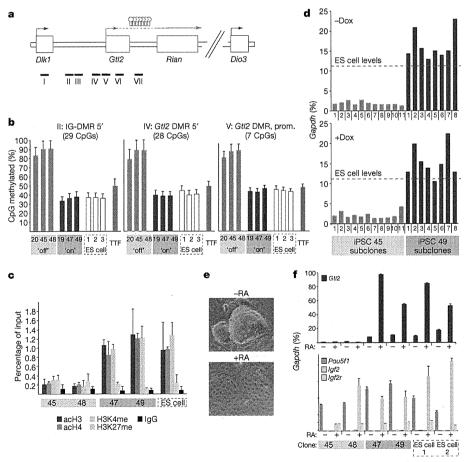


Figure 3 | Epigenetic silencing of the Gtl2 locus in iPSCs. a, Structure of the Dlk1–Dio3 locus with the position of the genomic regions (I–VII) analysed by pyrosequencing indicated by black bars. b, Degree of DNA methylation at IG-DMR and Gtl2 DMR in three Gtl2<sup>off</sup> iPSC clones (green bars), three Gtl2<sup>on</sup> iPSC clones (red bars), three ES cell clones (red open bars), as well as the parental tail-tip fibroblasts (TTF, grey bars). Analysis of the other regions is shown in Supplementary Fig. 5. c, Prevalence of activation-associated (acH3, acH4 and H3K4me) and repression-associated (H3K27me) chromatin marks at the Gtl2 promoter in two Gtl2<sup>off</sup> iPSC

clones, two Gtl2<sup>on</sup> iPSC clones and ES cells. **d**, Gtl2 expression levels as measured by qPCR in subclones derived from  $Gtl2^{off}$  clone 45 and  $Gtl2^{on}$  clone 49 in the absence (-) or presence (+) of doxycycline (Dox). **e**, Bright-field images of iPSC culture in the absence or presence of all-trans retinoic acid (RA). **f**, Expression levels of Gtl2, other imprinted genes (Igf2, Igf2r), and the pluripotency marker Pouff1 in cells cultured with (+) or without (-) RA. All error bars indicate standard deviations with n = 0 number of Gtl2 within the corresponding region in **b** and Gtl2 and Gtl2 in **c** and Gtl2.

approximately 50% of CpGs within IG-DMR and *Gtl2* DMR were methylated in fibroblasts, ES cells and Gtl2<sup>on</sup> iPSCs. In contrast, close to 100% of these CpGs were methylated in Gtl2<sup>off</sup> iPSC lines (Fig. 3b and Supplementary Fig. 5). The other analysed CpG-rich regions remained unaffected (Supplementary Fig. 5). Imprinting of the *Dlk1-Dio3* cluster is also regulated by histone acetylation<sup>36</sup>, and chromatin immunoprecipitation experiments indeed revealed a significant decrease in acetylated H3 and H4 as well as in methylated H3K4, another activation mark, in Gtl2<sup>off</sup> iPSC lines compared with Gtl2<sup>on</sup> iPSC lines and ES cells (Fig. 3c). Together, these observations demonstrate that the normally expressed maternal *Gtl2* allele has acquired an aberrant paternal-like silent state in Gtl2<sup>off</sup> iPSC clones.

Because imprinted gene expression is unstable in murine ES cells<sup>28,37</sup>, we assessed *Gtl2* expression upon subcloning of iPSCs. *Gtl2* remained silent in subclones from Gtl2<sup>off</sup> iPSCs and continued to be expressed in subclones from Gtl2<sup>on</sup> iPSCs, demonstrating stability of its expression state in undifferentiated cells (Fig. 3d, top). This pattern was not altered if doxycycline was administered during the subcloning procedure (Fig. 3d, bottom), indicating that overexpression of the reprogramming factors in established iPSCs is insufficient to induce or revert silencing.

To assess if silencing of *Gtl2* is resolved during differentiation, we exposed iPSCs and ES cells to the differentiation-stimulating agent retinoic acid. Marked changes in cellular morphology and downregulation of *Pou5f1* indicated successful differentiation (Fig. 3e, f). Whereas retinoic-acid-treated Gtl2<sup>on</sup> iPSCs and ES cells readily upregulated *Gtl2* 

(Fig. 3f, top) and *Rian* (Supplementary Fig. 6), Gtl2<sup>off</sup> iPSCs showed stable silencing of these genes, demonstrating that *in vitro* differentiation fails to reactivate maternally imprinted genes in the *Dlk1–Dio3* cluster. The expression of imprinted genes outside of chromosome 12qF1 was not affected (Fig. 3f, bottom, and Supplementary Fig. 6).

We next sought to gain an insight into the causes for the failure of Gtl2off iPSCs to produce viable all-iPSC mice. To this end, we determined if these cells could autonomously support development into early embryos. Indeed, injection of both Gtl2off and Gtl2on iPSC clones into 4n blastocysts gave rise to normal-appearing mid-gestation (embryonic day (E) 11.5) embryos (Fig. 4a). However, the number of live embryos obtained from Gtl2off clones was substantially reduced compared with Gtl2on clones (Fig. 4b), suggesting that Gtl2off mice die around this developmental stage. This phenotype resembles that of mice with paternal uniparental disomy of distal chromosome 1238, which die before E16.5, but is distinct from the phenotype of maternal Gtl2 knockout mice ( $Gtl2^{mKO}$ ), which die perinatally<sup>31</sup>. The less severe phenotype of Gtl2<sup>mKO</sup> embryos might be due to the comparably modest reduction in maternally expressed 12qF1 genes<sup>31</sup>. In agreement with this notion, we found low but detectable levels of *Rian* and *Mirg* transcripts in Gtl2<sup>mKO</sup> MEFs (Fig. 4c), whereas these genes were almost completely silenced in MEFs and different tissues derived from Gtl2off all-iPSC embryos (Fig. 4d, e).

Notably, expression of the *Dlk1* gene, which is reciprocally imprinted to *Gtl2* (ref. 39), was upregulated in *Gtl2* <sup>off</sup> MEFs but not in *Gtl2* <sup>mKO</sup> MEFs (Fig. 4c), further supporting the observation

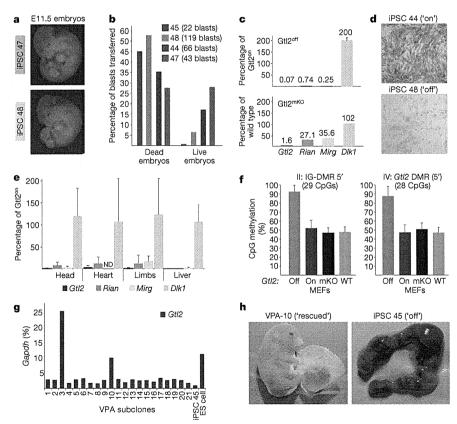


Figure 4 | Developmental defects in embryos derived from Gtl2<sup>off</sup> iPSCs. a, Images of 'all-iPSC' E11.5 embryos obtained with Gtl2<sup>off</sup> clone 47 and Gtl2<sup>off</sup> clone 48, both of which express EGFP ubiquitously from the ROSA26 locus. b, Frequency of dead and live E11.5 all-iPSC embryos obtained with two Gtl2<sup>off</sup> (red bars) and two Gtl2<sup>off</sup> (green bars) iPSC clones upon 4n blastocyst injection. Number of blastocysts transferred per clone is indicated in brackets. c, Expression of Gtl2, Rian, Mirg and the paternally expressed gene Dlk1 in Gtl2<sup>off</sup> MEFs relative to Gtl2<sup>off</sup> MEFs (upper panel) as well as in Gtl2<sup>mKO</sup> MEFs relative to MEFs isolated from wild-type embryos (lower panel). d, In situ hybridization for Gtl2 mRNA in MEFs derived from aliPSC embryos generated with either Gtl2<sup>off</sup> clone 44 or Gtl2<sup>off</sup> clone 48.

e, Expression levels of Gtl2, Rian, Mirg and Dlk1 in the indicated tissues isolated from all-iPSC embryos produced with  $Gtl2^{\rm off}$  iPSCs relative to the levels seen in tissues derived from  $Gtl2^{\rm on}$  iPSCs. **f**, Degree of DNA methylation at the indicated Dlk1-Dio3 regions in  $Gtl2^{\rm off}$ ,  $Gtl2^{\rm on}$ ,  $Gtl2^{\rm on}$ ,  $Gtl2^{\rm on}$  and wild-type MEFs. **g**, Gtl2 expression levels in iPSC lines derived by subcloning  $Gtl2^{\rm off}$  clone 45 in the presence of valproic acid (VPA). **h**, Images of a neonatal stillborn pup (left) and a uterus filled with resorptions (right) derived after 4n blastocyst injections with either VPA-10 or the parental iPSC clone 45, respectively. All error bars indicate standard deviations with Gtlandala = 1 in **c**, Gtlandala = 1 in Gtlandala = 1 in